眼の動く人形

一

空模様が怪しかったのと、四月の初めにも似合わない薄寒い風が吹いていたのとで、十一時には未だ少し間があろうという時だったが、もう人通りはすっかり杜絶えていた。別荘風の大きな家の立並んでいる所で、平生から物淋しい道だったが、今夜はそれが一層薄暗いように思われて、変に追駆けられるような気持になりながら、箕島は二三日前に新調したばかりの春外套の襟を立てて、足早に我家の方に急いだ。今日は不意に起った社用のために、無断でこんなに遅くなってしまったので、ただ一人留守居をしている彼の若い妻が、心配しながら待ち佗びているに相違ない事が、彼の足を一層早めさしたのだった。

ここは郊外といっても東京市に直ぐ続いた便利な所だったが、電車の停留場の附近の日当りの好い高台だけは、すっかりブルヂョア階級の人達に占領されていた。そのためにこの辺一帯は淋しい所になり、かつ箕島のような俸級生活者はここを通り抜けて、一段低いゴミゴミした小さい家の立並んでいる所に、追いやられねばならなかった。箕島はここに移った初め通勤の度に、この宏壮な家の並んだ一画を通ると、何となく不愉快な圧迫を受けて、時には態と廻り道をしたりしたのだったが、いつの間にか馴れてしまって、何とも思わなくなったばかりか、通り過ぎる道の両側に住んでいる知名の人の名を覚えて、反ってそういう人達が住んでいる事を、誇らしげに他の人に語ったりするようになっていた。

さて、箕島は馴れた道とて、暗闇の中をマゴつきもせず、愛妻が待ち佗びているという気懸りと、今夜に限って襟元が冷く、何者かに憑かれるような無気味な感じがするので、一心に足を急がしていたのだったが、変に道程が遠く感ぜられて、中々この淋しい一角が通り抜けられないのだった。

「ちょっ、どうしたというのだ。こんなに急いでいるのに、いつまでもこの道が続いているのは可笑しいぞ」

とこう彼が思わず呟いた時に、不意に前方にパンパン

という銃声のようなものが響いたので、彼は飛上るほどぎょっとした。

「ああ驚いた。自動車がパンクしたのかしら」

怪しい音は一度きりで止んだので、箕島は漸く気を静めて、一旦止めかけた足をまた元通り早めながら、真直ぐに進んで行った。

と、行手の道の真中に黒いものが横たわっていた。

「あっ」

箕島は忽ち足を止めて、同時に踵を返そうとしたが、しかし、さすがに逃げ出しもならず、恐々前の方をすかし見た。黒いものはどうやら人が倒れているのらしかった。

「酔漢かしら」

酔漢が往来の真中に倒れている事はよくある事だし、それにヒクヒク動いているようだったので、彼はいくらか安心しながら、ソロソロと近づいて行った。

と、不意に倒れていた男が、呻くとも呟くともつかず、異様な上ずった声で切々に喘ぐように云った。

「人形――眼の動く人形――」

そうして、手足を苦しげに二三回動かしたかと思うと、ガックリと頭をうな垂れて、じっと動かなくなってしまった。

様子が何となくただの酔漢とは思えなかったので、近寄りながらも、油断なく倒れた男の四辺に注意していた箕島は、つっ伏した男の胸の辺から、変にドス黒いものが流れ出しているのを見逃さなかった。

血！　血！　血！

「わあ――」

箕島は無我夢中で野獣のような叫声を上げながら、二三間飛退った。

「おい、どうしたんだい」

いつの間にどこから現われたのか、箕島は小柄のガッシリした男の手にしっかり支えられた。

箕島は思いがけない所へ、不意に見知らぬ男が現われたので、二重の恐怖に顫えて、水の切れた魚のように、パクパク口を動かしながら、容易に言葉が出なかった。

「ひ、人殺しです」

漸くの事でこれだけの事を云うと、箕島はブルブル顫える指頭で、前の方を指さした。

「なに、人殺し？」相手はちょっと驚いたようだったが、直ぐにうなずきながら、「そうか、じゃやはり今のは短銃の音だったんだな」

「そ、そうです」箕島は夢中で返辞をした。

「まあ、そう顫えないで、一緒に来給え」

小男は箕島の腕を摑んで、グイグイと引いた。それはその小男が出すと思えないほど強い力だったので、箕島は顔をしかめながら、ヨロヨロと前に出た。

「もう駄目だな」

小男は懐中電燈で屍体を照らした。斃れていたのは五十前後の肥満した紳士風の男だった。

「君は犯人を見たかい」

小男はクルリと箕島の方を向いて、鋭い声でこう訊いた。

「いいえ」

箕島には不意に現われたこの男が、一体何者なのか少しも見当がつかなかった。この淋しい一画を抜けて、箕島が住んでいる奥の方へ行く人達は、夜になると能く懐中電燈を持ったり、時に提灯を提げたりしていたので、この男が懐中電燈を用意していた事は、深く怪しむべき事ではなかったが、一向この辺りで見かけない人間だったし、それに口の利き方の横柄な事から見ても、あるいは刑事ではないかと思われるのだった。

「では、逃げた後だったんだね」

「ええ」

「機敏な奴だな」

そう云って彼は懐中電燈で屍体の附近を照らしていたが、やがて電燈の丸い白い輪はピタリと一ケ所に停止した。そこには鈍く光った小形の自働拳銃が転っていた。

「ふむ。兇器を捨てて行ったな」小男は一向興味のないように呟いた。

箕島はいくらか落着いてきたので、漸くこの小男を観察する事が出来た。

彼の身長は箕島自身が五尺四寸あるのから目測して、せいぜい五尺一寸止りと思われた。洋服を着ていたが、ネクタイは垢に汚れて捻けており、上衣はダブダブで襟はひどくよじれていた。彼の顔はひどく大きかった。普通の人よりは確かに一廻り大きく見えた。普通の人よりも小さい身体に普通よりも大きい顔がついている事は、何となくグロテスクなものであるが、更に一層彼の姿をグロテスクにしたのは、顔色が磨きをかけた赤銅のように赤黒くキラキラ光っている上に、殆ど顔全体を占領しているかと思われるほど、巨大なそうして尖の曲った所謂鷲鼻という形の鼻が、ギロリとした眼の下に超然として隆起している事だった。その全体の姿は西洋の童話に出て来る妖婆を思い出させるのだった。

「君、行こうや」

彼は退屈したという風に、茫然としている箕島を促がした。

「ええっ、これを抛っとくんですか」箕島は吃驚した。
「ああ、格別面白い事はなさそうだからね」彼には映画を見た後ほどの感激もなさそうだった。
「殺すには殺すだけの理由があったろうし、殺されるには殺されるだけの理由があったんだろうから、俺達の関係した事じゃないよ。こうしておけば警官がちゃんと始末をして、必要があれば犯人を見つけてくれるよ」
「でも」箕島はもじもじしながら、「この人は手当をすれば生き返らないでしょうか」
「駄目だ。到底駄目だよ」
「しかし、たった今、恰度私がここへ来た時に、この人は譫言のように口を利いていました」
「ふうん」小男は気乗りがしないように、「どんな事を云っていたね」
「確か『人形――眼の動く人形』と云っていました」
「ええっ」今までの平然たる態度に引替え、小男は箕島の言葉に仰天するように驚いたが、すぐ元の冷静な態度に戻った。
「それは君本当かい」
「本当ですとも」箕島はきっぱり答えた。
と、小男は箕島の答えを半ば聞流して、屍体の方に飛んで行った。

あっ、と思ううちに彼はもう屍体を抱き起していた。それから彼は上衣や胴着のポケットを探った。それから屍体の顔をじっと見つめたり、傷口を調べたり、忙しくしかし、微細な点に渡って眼と手を働かした。
やがて、一通り観察がすむと、屍体をそっと元の位置に寝かして、先刻一瞥しただけだった短銃を注意深く取上げた。そしてそれを彼のポケットにそっと滑り込ました。それからなお暫くジロジロと鋭く屍体の周囲を睨み廻したが、不意に箕島の方に向き直った。
「君、行こう」
「ええっ」あまり唐突な言葉に箕島は面喰いながら、「どこへ行くんですか」
「黙ってついて来給え」小男は命令するように云った。
「しかし――」箕島はしょんぼり家で待っているであろう所の彼の愛妻を思い出した。
「細君が待ってるとでも云うのかい」小男は箕島の心の底を見抜いたようにニヤリとしながら、「まあついて来給え。満更後悔するような事はなかろう、一晩位細君を心配さすのも好いじゃないか」
この魔法使いの妖婆を思わせるような男の薄気味の悪い言葉のうらには、何となく否めない親しみと、振り切る事の出来ない魅力が籠っていた。箕島の弱気と人並の

好奇心は、渋々彼に従うべく余儀なくしたのだった。
「どこへ行くのですか」彼は再びこう訊いた。
「ついて来給え」
妖婆のような男は屍体には最早一瞥も呉れず、さっさと停留場の方に歩き出した。

二

「さあ、上り給え」
手塚龍太はあっけに取られている箕島に事もなげに云った。
手塚龍太というのは箕島を誘った怪しい小男の名だが、彼は停車場の近くに来ると、折柄走って来たタキシーを止めて、箕島を招き入れて、どこともなく急がした。その自動車の中で、箕島は彼の名を聞いたのだった。
箕島は手塚と名乗る男の怪奇な振舞いと、気味の悪い容貌とに少なからず危惧の念を抱いていたけれども、彼の持っている一種の魅惑的な威力に打ち克つ事が出来ず、渋々彼と行動を共にしない訳に行かなかった。やがて自動車はとある大きな家の前に止ったが、それが手塚の家と思いきや、彼は玄関の呼鈴を鳴らして、おずおずと出て来た取次の女中に横柄な態度で、
「主人は留守だろう」
と云った。そして女中が怪訝な顔をしながら、
「はい」
と答える暇もなく、ツカツカと玄関に踏み込んで、さて、箕島に向って、
「さあ、上り給え」と云ったのである。
箕島は彼の乱暴さにあきれたが、それよりも驚いたのは女中である。
「あの、どなた様でございますか。只今奥さまもお留守なんですけれども」
「奥さんは店の方だろう」彼は平気だった。
「いいえ、伊豆の方に行ってらっしゃいます」
「そうか。店の者は誰もいないかい」
「はい、私と婆やだけです」
「それは好都合だ。ちょっと調べたい事があるのだから、主人の居間に通してくれ」
そう云って、彼はもう女中などは尻目にもかけず、勝手を知った家のように、ドンドン奥に這入って行くのだった。
箕島も何の事だか分らぬなりに度胸を極めて、彼の後に従った。女中は警察官とでも感違いをしたのか、強い

て止めようとはせず、ただ茫然としていた。
「え――と、ここが居間だな」
部屋は日本室だったが、絨氈を敷いて椅子机を置いた西洋式の調度のある所へ、彼はツカツカと這入って、ジロジロと四辺を眺めたが、隅の方に置いてあった大型の金庫の前に猶予なく近づいた。
「ふむ。大分旧式のものだな」
彼は金庫を暫くためつすがめつ見ていたが、こう呟いて金庫の傍に寄って、カチカチと音をさせたかと思うと、もう金庫の重い扉がギイと開いたのだった。
「あっ」あまりの事に、箕島が思わず叫声を上げる暇もなく、彼は金庫の中から大部の帳簿を二三冊抱え出して、椅子の上にドッカと腰を下して、バラバラと急がしく頁を繰り出した。
少し遅れて不安そうについて来た女中は、この有様を一目見ると、あっけにとられて棒立になった。しかし、手塚は平気だった。
「え――と、なるほど、これだな」
彼は大きくうなずくと、箕島を呼びかけた。
「おい、君、さっきここの主人の斃れていたのは、何という家の前だったかね」
「え、え、ここの主人が」箕島は吃驚した。
「そうだよ。この主人の柏木金之助が斃れていた所さ」
「あの、旦那様がどうかなすったのですか」女中は小耳に挟んだ容易ならぬ言葉に顔色を変えながら訊いた。
「殺されたんだよ」手塚は不様に大きい鼻に皺を寄せて、卑しい笑いを見せながら云い放った。
「えっ」女中は大声に叫んだ。
「柏木金之助はね、自分のピストルでね、一発でやられたんだよ」
「えっ、それは本当ですか」
「本当とも」
「それは大変です、直ぐ奥さまに知らせねばなりません。警察の方にも来て頂かなくてはなりません」女中は狂気のように叫んだ。
「そうあわてなくていいよ」彼は平気だ。「奥さんに知らせた所で生き返るものではなし、警察には別に態々知らさなくても、今頃はもう屍体を発見して大騒ぎをしているかも知れん。もっともあの屍体が柏木金之助だという事はちょっと分るまい。僕が名刺入れを取り上げて来たからね。まあ静かにしてい給え。僕は決して為にならぬ事はしないから」
手塚は女中の騒ぎ立てるのを制して、箕島の方に、妖婆のようないやらしい顔を向けて、物凄い眼をギロリと

光らせた。
「何という家の前だったかね」
箕島はあの辺の家の名は殆ど暗記していたので、喉の所まで出て来ているのだが、どうしたのかちょっと急に云えないのだった。
「え――と、石、いし何とか云ったっけなあ」
「白石新一郎だろう」彼は教えるように云った。
「あっ、そうです。白石です。確かに新一郎といいました」
「そうだろう」彼は満足気にうなずいて、「これですっかり分ったよ。おい、君」
彼は女中を呼びかけた。
「はい」
「君は長くこの家にいるのかい」
「はい、三年ほど居ります」
「そうか、それでは一年ばかり前だ。この家で、しかもこの室(へや)だと思うが、若い美しい夫人が死んだのを知ってるだろう」
「はい、存じております」女中は、手塚の顔を驚いたように見詰めながら、「菅原精一さまの奥さまでたみ子様と仰有(おっしゃ)る方でした」
「そうだ。菅原代議士の夫人で、有名な貞淑な美しい女だったね。あれは確か自殺とも他殺とも病死とも判明しなかったようだったね」
「はい、あれは夜の八時頃でございましたかしら、たみ子さまがここへ訪ねて来られまして、旦那さまと話をしていらっしゃいましたが、急に気分がお悪くなりまして私が呼ばれて参った時にはもうバッタリと斃れておいでになりました。直ぐお医者を呼びましたが、もう駄目でございました。警察の方でもいろいろお調べになりましたが、何かの中毒のようではあるが、他殺とも自殺とも分らないという事でした」
当時を回想するように、女中は恐ろしげに云った。
「君が駆けつけた時に夫人はもう何も云わなかったかね」
「はい、一言二言譫言(うわごと)のような事を仰有いました」
「どんな事？」
「はい」女中は云おうか云うまいかと暫く躊躇していたが、「あの、確か当時新聞にも出ましたと存じますが、たみ子さまは夢中で『人形――眼の動く人形――』と仰有っていました」
「ええっ」
今までじっと二人の奇怪な問答を聞いていた箕島は、この時に飛び上るほど驚いた。

「有難う」手塚はニヤリと薄気味悪く笑って、女中に礼を述べながら、「お蔭ですっかり分った。この上は犯人を捕まえるばかりだ。この帳簿は元の通り金庫に蔵っておくよ。明日あたり殊によると、警察の者が訪ねて来るかも知れぬ。その時になるべく我々の来た事は黙っていてもらいたい。しかし、君が云いたければ云っても構わぬよ」

手塚はこれだけの事を悠り云うと、小さい身体をムックリ起して、帳簿を元の金庫に収め、四辺をグルッと一度見廻した後に、

「どうもお邪魔したね。では、君帰ろう」

手塚は箕島を促して悠然と外に出た。

「十二時少し過ぎたね」

彼は時計を門燈にすかして、呟くように云ったが、

「ところで、箕島君、君に一つ頼みたい事があるのだが、一緒に僕の家まで来てくれないか」

そう云って彼は箕島の返事を聞くまでもなく、さっさと歩き出した。

三

翌朝、箕島はかなり遅く眼を覚ましたが、後頭部がズキズキと痛んで、容易に床の中から出られなかった。余儀なく彼は一日会社を休む事にした。

昨夜は奇怪な事件につき当って、奇怪な手塚という人物に、夢中で引摺り廻されたが、最後に彼は手塚の家というのに、無理やりに連れ込まれた。彼の家は箕島とは別方面のやはり繁華な郊外の一角にあって木造の西洋館で、中は人気のないようにガランとしていた。そこの一室で暫く待たされた時には、箕島は安達ケ原の魔女の棲家に連れ込まれたような気がしたものだった。

やがて姿を現わした手塚は片手に原稿のようなものを持っていたが、

「君、すまないがこれを一つ書直してくれないか」

と云って、その原稿を差出したので、箕島はおずおず読んでみたが、思わずあっと顔色を変えた。それは警視庁宛の密告状で、大体の意味は次のようだった。

今夜十一時頃郊外××停留場附近高台の白石新一郎邸

前で殺人がありました。殺されたのは有名な宝石商の柏木金之助です。犯人は短銃で一発の許に彼を射殺して、逸早く逃走しましたが、多分彼は強窃盗の前科のあるもので、柏木を射殺す前に白石邸へ忍び込んだのではないかと推定されます。白石邸から出て来る所を、柏木に見咎められて、止むを得ず射殺したのではありますまいか。とにかく、私は犯人の姿は認める事は出来ませんでしたが、幸に犯人の指紋を取る事が出来ましたから、同封して送ります。無論貴庁の台帳に乗っている事と思いますから、それによって容易に犯人を決定する事が出来ましょう。

「こ、これはどういう事ですか」

読み終った箕島は叫んだ。そうすると、手塚はニヤリと笑いながら、

「何でもない。犯人を警視庁に教えるのさ。指紋は短銃についていたので、今写真に撮っておいたから、今晩中には現像が出来る。そうしたらそのフィルムを封入して送るのさ。僕の筆蹟では少し都合の悪い事があるので、君に頼むのだが、君は真逆その憎むべき殺人犯人を庇護して、密告するのに躊躇するような事はあるまいね」

箕島はその時に二言三言云い争ったが、結局密告状を書く事を余儀なくせられたのだった。密告状が出来上ると、彼はニコニコしながら、尖った醜い鼻を、箕島の頬にすり寄せた。

「君、菅原代議士というのはとても喰えない悪漢だぜ。富豪や貴族の弱点を押えてはね、凄い脅迫をやってウンと金を拵えている奴なんだ。彼の悪行のために彼の夫人は不思議な死に方をしたのだ。今度は奴を少し苛めてやる事が出来そうだ。そうした暁には君にだって、ただは骨を折らしはしないよ」

悪魔の囁きに似たものを耳許から吹き込まれた時に、箕島はただ訳もなくブルブル顫えた。代議士の菅原精一という男が、好くない人間で、警察からも絶えず注意されながらも、少しも尻尾を摑まれない強かな者であるという噂さは満更聞いていないでもなかった。しかし、その菅原の上を行こうという怪人物にはどう答えて好いのか、ただ子供のように縮み上る他はなかった。

一体宝石商の柏木の死と菅原代議士との間にはどういう関係があるのか。犯人が白石邸に忍び込んだという事が、どうして手塚に推察出来たのか。犯人が強窃盗の前科者だとはどうして分ったのか。また「眼の動く人形」という言葉は何を意味するのか。何もかも分ったような顔をしている手塚は何者か。箕島は恐ろしくてならなか

った。彼は早々に彼の許しを乞うて自動車に送られて帰宅した。もう二時に近かった。

床の中で昨夜の奇怪な出来事を一通り思い浮べた箕島は、今更のように不安に顫えながら枕許の新聞を取り上げて、いつも一面の広告から悠り読むのを、もどかしいとばかりに社会面を開けた。と、大きな活字で、

××ケ岡の怪屍体

という見出しが眼についた。

大急ぎで読んでみると、今暁××ケ岡の白石氏邸前に短銃で胸を射抜かれた紳士風の男の屍体が発見せられた。所持品を調べてみたが名刺その他手掛りになるようなものがないので、いずくの者とも判明しない。なお本事件と関係があるかどうか分らぬが、同夜白石邸には窃盗が忍入った形跡があった。しかし何一つ紛失したものがないので、同邸では不思議に思っている。同邸内の門番小屋にいた某は十一時頃銃声らしいものを聞いたと云っている云々と書かれていた。

箕島はそっと顔を上げた。そうして庭越しに遥か向うに聳えている××ケ岡を見上げて、ホッと溜息をついた。

彼は漸くの事で起上ったが、新聞記事に気がついたかつかぬか、とにかく、妻が何となく異様な眼を光らして自分を見ているように思えて仕方がなかった。しかし、彼は彼女に昨夜の奇々怪々な事件を説明するだけの勇気もなかった。

その日の夕刊にはまたまた箕島の心を痛めるような記事が出ていた。

それは××ケ岡の屍体は有名な宝石商の柏木金之助だった事、解剖の結果銃殺せられたものに相違ない事、意外な方面から密告があって、犯人はやがて捕まるだろうという事、それから白石方では盗難品は少しもないという事だったが、取調べの結果同家主人が柏木から買入れた時価四万円という真珠の頸飾が紛失していた事が判明した。右の窃盗犯人が頸飾を盗み出して、同家を出ようとする時に、偶々来合せた柏木が、彼を見咎めたので、兇行に及んだのかも知れないという事などが事々しく掲載されていた。が、最も箕島の心を痛めたものは僅々数行であったけれども、昨夜遅く柏木の留守宅に怪しい二人の人物が乗込んで、同家の女中と二三問答して悠々と引上げたので、警視庁では目下厳探中という記事だった。

箕島は食事も碌に喉に通らず、その日一日を鬱々として送ったのだった。

その翌日は幸に休日だったので、箕島は頭が痛いと称して、――実際に痛かったのだが――やはり朝遅くまで床の中にいた。そうして恐々枕許の新聞を開いて見ると、

忽ち眼を打ったのは、

宝石商殺しの犯人捕わる。

という大きな活字だった。

箕島は惹き入れられるように読み耽ったが、それは先晩来の出来事に輪をかけたような奇怪事だった。

宝石商殺しの犯人はその筋の手に入った指紋によって、人相姓名判明し、厳探中だったが、昨夕かねて手配中の友人の所に立寄ったのを捕縛する事が出来た。彼は亀津文六という強窃盗前科三犯の強か者で、訊問を受けると、神妙に罪状を告白した。しかし、彼の意外な白状には掛官(かかりかん)は些か驚かされたのだった。

彼の申立てる所は次のようだった。

「私が宝石商の柏木金之助を殺したのに相違ありません。実は私は三四日前の晩に、柏木の家に窃盗の目的で忍び込んだのです。ところが柏木という男は油断のない男で、いつの間にやら私の忍び込んだのを嗅ぎつけ、あべこべに私を短銃で脅かしました。そうして云いますには、

『俺の云う事を聞けばよし、さもなければ即座に告発するぞ』と脅かすのです。

私は場合が場合ですから、仕方がありません。

『どんな事でもいたしますから、どうぞお許し下さい』と涙を流さんばかりに申しますと、

『宜しい、それでは白石新一郎の所へ忍び込め』と云うのです。

『えっ、あっしにその白石とかいう家に忍び込んで、何か盗めと云うのですか』あっけに取られた私がこう云いますと、

『いいや、何にも盗らなくても好いのだ。一度忍び込んで、そのまま出て来れば好いのだ。とにかく、盗人(ぬすっと)が這入ったという形跡だけを残して来れば好いのだ』とこう云うのです。

私には何が何やら訳が分りませんでしたけれども、とにかくその通りにしなくては、警察へ突出されるのですから、止むなく云いなりになる事にしました。で、その翌々晩でした。私は白石家の勝手をよく柏木から聞いていたので、首尾よく見咎められないで忍び込む事が出来ました。で、何か忍び込んだ形跡を残しておけという事でしたから、応接室の隅の棚に燻(くすぶ)っていた人形を一つ、何気なくヒョイと懐中(ふところ)に入れて、そのまま帰ろうと思いましたが、あまり旨く行ったものですから、つい慾が出ました。何しろ窃盗を商売にしているのですから、あれ位の大きな家に易々(やすやす)と這入りながら、金目のものを何も

取らずに出るなんて、馬鹿々々しいという気がしたのです。それで約束とは違いましたけれども、金庫の中の真珠の頸飾りを一つ頂戴しました。

それだけの仕事をして、十一時頃でしたが、外へ出ると、監視の意味だったのか、思いがけなく柏木が門の傍に立っていたのに会いました。

『旨くやったかい』と訊きますので、

『へい、旨く行きました。這入った証拠にこんなものを貰って来ましたよ』とそう云って、頸飾りの方は無論隠して、例の人形の方をヒョイと彼の前に差出したのです。

そうすると、彼の顔色がさっと変りました。私は全く以ってああ瞬間に人の相が変るものだという事は知りませんでした。実に物凄い形相でした。そうして一言も口を利かないで、突然私に飛かかろうとしました。私は不意だったので驚きましたが、ははあ、この人形は何か大切なものだなと気がつきましたので、

『旦那何をなさるのです』と云いますと、

『その人形を寄越せ』と喘ぐように云ったかと思うと、忽ち短銃を取り出そうとしたのです。

私は思わず嚇としました。前々晩短銃ではひどい目に遭っています。そうして私にこんな詰らない事をさせておきながら、偶然私の盗んだ人形を奪うために、またまた短銃で脅かそうとするのですから、私も非常に立腹しました。で、逆に柏木に飛ついて、短銃を奪って、一発の許に彼を射ち殺しました。そうして一目散に逃げ出しました。

ところで、みなさん、お聞き下さい。私は呪われたのです。全くアノ人形のために呪われました。

隠家に帰って、まず頸飾りをいつもの隠場所に納めて、さて、つくづく盗んで来た人形を見ますと、実にぞっとするような怪奇な姿をしているのです。

高々七八寸の背で、黒ずんだ灰色の気味の悪い膚をしている金属性の裸人形ですが、その顔の相は悪魔そっくりなのです。眼は円くギラギラ光り、鼻は平たく膨れ、口は大きく彎曲しています。実に二た目とは見られない怪異な相です。それに私には今大罪を犯して来た弱味がありますから、その人形は恰度私の犯罪を知り抜いて咎めでもするように私を睨むのです。私はその人形がだんだん恐ろしくなり、じっと見ているに堪えませんでした。で、そっと眼を外そうと思った途端に、人形の眼がギロリと動きました。

『あっ』と思わず声を上げましたが、一生懸命に勇気を出して、おのれと思いながら、人形をじっと睨みつけ

ますと、ギロリとまた眼が動くのです。

『畜生！』私はそう呶鳴って、恰度湯を沸すために火のつけてあった瓦斯七輪に人形を叩き込みました。

見ているうちにメラメラと熔けるだろうと、嘲けるように人形を見ましたが、奴は平気なものです。見る見る半身は赤くなりながら、相変らず、いや前よりも盛んに眼をギロギロと動かしているのです。

私はもう耐らなくなりました。瓦斯の火を消すと、そのまま外へ飛出しました。それから一度も家に帰りません。今日友達の所へ寄ったのは実は後の事を頼んで自首して出るつもりでした。

私も生れつきの強情で、恐ろしい目にも度々会った事はありますが、あの人形みたいな忌々しいものに出会った事はありません」

語り終った彼はさも恐ろしいという表情をしたのだった。

掛官は彼の言葉に従って、早速彼の隠家を訪ねたが、真珠の頸飾りは発見する事が出来たが、問題の眼の動く人形はどこにも認める事が出来なかった。一同は非常に不審に思いながら、引上げる他はなかったのだった。

読み終った箕島は茫然とした。眼の動く人形の奇怪な物語りは、彼を極度に感銘させずにはおかなかった。しかし、一方ではとにかく殺人犯人が捕縛されたので、彼が蒙るであろう所の嫌疑も、これで消滅した訳なので、彼はホッと安心しながら、ノソノソと床の中から這出した。

と、表に訪う声がして思いもかけず手塚から迎えの自動車が来たのだった。

「眼の動く人形の神秘相解け申候につき」という数行の文句が、箕島の心を強く刺戟して、不安そうな顔をしている妻を尻目にかけて、いとも勇敢に手塚の招きに応ぜざるを得なかったのだった。

四

「ハハハハ、今日は面白いものが見られるぜ」

自動車が途中で止ると、ぬっと這入ってきたのは、例の怪異な相をした小男の手塚だった。

「眼の動く人形というのはどういう事なのですか」箕島は幾分心易く訊いた。

「まあ、暫く辛抱し給え。直ぐ分るから」

自動車はやがて宏壮な建物の前に止った。それは思い

がけなく代議士の菅原精一の家だった。

二人は直ぐに贅沢の限りを尽した広々とした応接室に通された。

腮髯を長く延ばして傲然とした中年紳士が、葉巻を片手に悠然と現われて、卑しむように二人を見下しながら、「何か用かね」と云った。

「あまり好い用じゃないよ」手塚は揶揄うような口調で、「ちっとばかり無心に来たのさ」

「怪しからん」菅原はむっとしたように、「無心なら無心らしく云うが好い。その口の利き方は何だ」

「ウフフフフ」手塚は薄気味悪い笑を洩らしながら、「無心にだって頭を下げて貰うのと、威張って貰うのとあらあな。俺のは頭を下げるような生優しいのじゃないのだ。おい、菅原、俺はこれが買ってもらいたいのだ」

そう云うと共に手塚はトンと力強く卓子に何か叩きつけた。見ると、それはいつの間に取り出したか、一つの金属性の人形だった。

「あっ、それは」菅原はサッと顔の色を変えた。

人形は例の亀津が白石の所から盗み出したものに相違なかった。顔は確かに彼の語ったように一眼見てもぞっとするほど妖異な相で、膚は蛞蝓のように蒼白く光っていた。そして、何よりも怪奇に恐ろしく見えたのは、そのギロギロと動く両眼だった。

「どうだ、驚いたろう」手塚はせせら笑いながら、「このギロギロと動く眼は、恰度天秤の皿のように、眼の玉と同じ重さのもので平衡を取った、尖った針のようなもので中心が支えてあるのだ。だからこういう風にギロギロ動くのだ。そうしてその眼の玉とバランスしている代物は何だと思う、飛切り上等のダイヤモンドなんだぜ」

「う、う」菅原は口惜しそうに唸った。

「ハハハハ、飛切上等の大粒のダイヤモンド二つ、これは君の亡くなった細君のものなのだぜ」手塚はまたも毒舌を弄し始めた。「細君はそれを宝石商の柏木に頼んで、こういう機関を造ったのだ。それを君が欲しさに細君を苛め抜き、とうとう殺してしまったんだ」

「う、う」菅原はまた口惜しそうに唸った。

「だが、君の欲しかったのはこの人形の眼の奥についているダイヤモンドではない、実は腹の中に這入っている一枚の紙なんだ」

「わあ――」

何か訳の分らぬ叫声を発して、菅原代議士は手塚に飛かかろうとした。が、手塚は忽ち体をかわして、菅原を捻じ伏せてしまった。小男ではあったが、彼の腕力は箕島も経験した通り、普通以上だった。

「ハハハハ、そう易々とこれを渡してなるものか。この人形の腹の中の紙片には、貴様の数々の罪状の退引ならぬ証拠が書きつけてあるのだ。貴様の貞淑な細君は度々貴様の悪事を諫めたのだ。しかし、貴様が一向聞かないものだから、彼女は貴様の罪状を書き連らねた紙片をこの人形の腹の中に隠して、それで貴様を威しながら改心させようとしたのだ。彼女が人形の眼の奥に高価なダイヤモンドを仕掛けたのは、こうしておけば彼女がこの怪異な人形を大切にしても、全く宝石のためだと思われて、腹の中の紙片の事は容易に気づかれないためだ、貴様はこの人形が欲しいばかりに、細君を亡きものにしようと思って、少しずつ毒薬を嚥ましたのだ。彼女はそのためにとうとう柏木の家で不思議な死に方をしたのだ。けれども、お気の毒な事には人形はいつの間にか盗まれて、行方が知れなくなったのだ。どうだ、俺の云う事に間違いがあるか」

得意気に語り終ると、手塚はぱっと菅原を突き放した。

「うぬ、うぬ」菅原は拳を固めて息巻いた。

「さあ、これだけ云って聞かせれば大抵分ったろう。いざこざを云わないで、十万円の小切手を書け。皮切りにしては安いものだ。これからだってそう度々無心には来ないよ」

菅原代議士は地団駄を踏んで口惜しがったが、結局弱味のあるものは致し方がない。彼は渋々十万円の小切手を書かざるを得なかったのだった。

「これが現金になるまでに変な事をすると、人形の腹がものを云うぞ」

こういう捨台詞を残して、苦り切っている菅原を尻目にかけながら、手塚は悠々と引上げて行くのだった。箕島は無論茫然としながら彼の後に従った。

五

「どうだい、世の中には面白い金儲けの方法があるだろう」

手塚は彼の居間の大きな肱突椅子にチョコナンと坐りながら、大きな鼻をうごめかした。

「ですが、一体あなたはどうして今度の事件を解決したのですか」箕島は恐る恐る訊いた。

「柏木の斃れている所に行ったのは偶然さ。そこで、君から彼が死ぬ間際に『眼の動く人形』と云った事を聞いて、これはてっきり宝石商の柏木か、代議士の菅原に関係のある事と睨んだのさ。と云うのは一年ばかり前に

柏木の所で菅原夫人がやはり『眼の動く人形』と云って斃れた事があったからね。そこで屍体を探って見ると、名刺入があって、即ち柏木自身だという事が判った。で、何か旨い汁を吸うまでは警察に騒がれたくないと思って、名刺入れも指紋のついた短銃も失敬したのだ。

ところで柏木の所に行って、金庫の帳簿を調べて見ると、彼の得意先に売ったもののうちで変な印がついているものがある。ふと思いついたのはこの柏木という奴がいかさま師で、偽物を方々に売りつけたのではないかという事だ。だんだん調べてみると、白石新一郎に売った真珠の頸飾りにも変な印がついている。彼の斃れていたのが白石の家の前だし、白石というのは有名な実業家で、近々自宅で夜会を開くという噂さを聞いている。でつまり、柏木が白石に偽物を売ったが、それが暴露しそうで困った。で、誰かを唆かして盗みに這入らした。ところが偶然に白石の所に例の人形があって、それを盗んで来たので、格闘になって射殺されたのではないか。という推論が生れて来たのさ。とすると、柏木を殺した奴は窃盗の前科者で彼に頸飾りを盗むべく頼まれた奴に相違ない。人形はいずれ転々して白石の手に這入ったのだろう。彼もホンの物好きで買って、やがて忘れてしまったと見える。現に盗人の這入った形跡がありながら、人形の紛失には一向気がつかなかったので判る。

で、この上は人形を探すだけだ。それには犯人を捕まえるに限る。で、例の密告状を書いたのだ。そうして、彼が捕って警察で調べられている間に、そっと彼の家に行って人形を盗んで来た。真珠の頸飾りの在所も分ってはいたが、誰があんなものを盗るものか。真赤な偽物じゃないか。柏木だって盗ませる気はなかったのだ。ただ盗人を一人忍び込ましておいて、後でそいつがすり替えたという事にする積りだったのさ。人形を手に入れてから、一生懸命にひねくり廻して、柏木や、菅原夫人があれほどに執着して欲しがった理由を考えてみたよ。で、結局さっき菅原の所で云ったような結論に達したのさ。菅原も度胸のない奴だ。俺がポンと人形を卓子の上に出した時に、さっと顔色を変えさえしなければ、俺の推理はああスラスラと出なかったのさ。奴は自分で白状したようなものだ」

ギロリギロリと眼を動かして、グロテスクな大きな顔に得意の色を浮べながら、説き立てていた手塚は、何と思ったか、この時に彼の容貌よりはもう一層怪異な例の人形を取り出して、暫く眺めていたが、両手で人形の頭と足を押えると、勢よく机の角に中ほどをぶっつけた。人形の首はポキリと取れた。

「あっ」箕島は驚いて叫んだ。
「どうだい」手塚はしかし平気で取れた首の空洞を示した。首の中ではピカリと美事な大粒のダイヤモンドが光っていた。
彼は無雑作に首の中に指を突込んで、ゴソゴソしていたが、やがてポロリと二つの宝石が机の上に落ちた。
「ところでだ、君、この胴体の中を覗いて見給え」彼は首の取れた胴を箕島に渡しながら、「多分焼けて炭化したボロボロの紙片が這入っているだろう。何しろ、この人形は例の亀津が恐ろしさのあまり、瓦斯焜炉の中へ投げ込んだのだからね。人形はクロームで出来ているから、容易に熔けやしない。だけどもね腹の中に這入っているのは紙だから耐らない。焦げてしまうさ。ね、そうだろう」
箕島は驚いて胴を振ってみた。中からは手塚の云った通り、黒焦げになったボロボロの紙片が出て来た。
「じゃ、あの、菅原は――」箕島はいろいろの感情が込み上げて来て、ちょっと口が利けなかった。
「アハハハハ、アハハハハ」小柄な悪魔は喉仏まで見えるように大きな口を開いて腹を抱えて笑い出した。地獄の笑いとはこんなものであろうと、箕島にはそれが呪いの声であるかのように、ぞっとせずには聞かれなかった。「アハハハハ、菅原の奴は灰になった証文を十万円で買ったのだぜ。アハハハハ」
彼の笑いは容易に止まなかった。が、やがて笑いを止めると、彼は卓子の上の二つのダイヤモンドを比べて見ていたが、
「こっちの方が少し小さくて、性質も少し劣るようだが、まあこれで我慢してくれ。分前だ」
箕島は掌の上に置かれた大粒のダイヤモンドをどう処置して好いやら分らず、身体をブルブル顫わしていた。